

私が石垣島に住み始めて感じたことの一つが、地域で「伝統芸能」を目にする機会が多いということだ。何かしらの祭りや催しが頻繁に開催されていて、そこでは数多くの芸能が奉納されている。

八重山に生まれ育ち暮らしている人たちにとっては、そのように伝統芸能が日々身近にあることはあたりまえのことなのであろう。一方、そのことは人々の間で伝統芸能が古くから大切に継承されてきたことを示しているのかもしれない、と思う。

『沖縄芸能のダイナミズム』は研究者7人による、沖縄伝統芸能に関する最新の論考集である。

多種多様に「創造」され、近世・

## 書評



近代そして現代へと受け継がれてきた沖縄芸能が、20世紀以降の人々の生活様式の変化や技術の進歩に伴いどのように変容していったか、また、沖縄がラジオや移民によって外部と接触するなか、伝統芸能としての「表象」をいかに形成していったかにつ

あった。鑑賞しているだけでは知ることのできない芸能の仕組みや背景を学ぶことができる貴重な一冊である。

八重山住人として興味を引いたのは、やはり第一章の「八重山の祝宴」に関する飯田泰彦氏の論考である。

# 『沖縄芸能のダイナミズム』 —創造・表象・越境—

古書カフエウさぎ堂 千葉 茂 之

いて、気鋭の研究者たちがそれぞれテーマと視点で、最新の資料や調査に基づき明らかにしていく。

私には最初、いささか敷居が高く感じられた本だが、いざページを開いてみれば読みやすく図や写真も多くて分かりやすい、楽しい論考集で

氏は、現代八重山で実際に行われた祭りや生年祝い・結婚式など、九つの実例をあげ細かく解説しながら、八重山の祝宴の表現が豊富で多彩である理由を探っていく。

「一般に祝宴は、威儀を持って始まり、時間とともに打ち解け、楽し

い歌や踊りに興じて終了するという流れが共通する」という。多数の島しょ社会で成り立っている八重山では、島ごと地域ごとに細かい部分で祝宴の様子も違ってくるように思える。

ここで氏が提示する「八重山の祝

宴の構成モデル」を見ると、独自性の高い与那国島の例を除けば、ある一定のルールにのっとっていることが分かる。

八重山では、先人たちが祝宴のなかに祝儀舞踊(長者の大王)系芸能の演目を一種の「装置」として配置し伝統文化継承のシステムを創り上げてきた。「祭儀」と「饗宴」で構成される祝宴において、祭儀から饗宴へ宴が切り替わる際に、例言などの(長者の大王)系芸能がとり行われることにより、饗宴に祝儀性を流し込み、参加者が主題を再確認した上で、その後の芸能づくしに興じてゆく、という流れである。

そのシステムのなかで、八重山の祝宴は「伝統的な文化を継承しながら、新しい芸能を生み出し続ける」ということが可能になる、と氏は結論づける。

本書には他にも、今から300年

前に宮廷で誕生した組踊や、その継承問題についての論考、沖縄移民によるハワイでの琉球盆踊りや戦後ラジオで広められた沖縄イメーシの研究本島におけるエイサーの伝播での考察など、興味深い話題がそろっている。沖縄県民のみならず沖縄伝統芸能に関心がある人なら手にとってほしい価値ある一冊である。

八重山で伝統芸能が身近に存在する生活を始め、これまで芸能に興味があなかった私が、毎年島の各所に獅子舞を見に行くようになり、とうとう「一大大会の日程をカレンダーで確認し、また、街で三線の音色を耳にするようになった。

ほんの少しだけだが、伝統芸能を通して八重山が私の心に根をおろしつつあるのかもしれない。

(七月社、2020年)

